

互譲の精神

公益委員 原田耕藏

かつての職場で外部の方と職員の間でトラブルが発生した。トラブルの原因はお互いの意思疎通がうまくかみ合わなかったことによるものであったが、その方から猛烈な抗議が寄せられた。職員に事の経緯を聞いてみると職員の言い分にも一理ある。

お互いもっと落ち着いて丁寧に話しておれば、うまく行ったはずの出来事がほんの些細な行き違いから傷口が大きくなってしまったものであった。

こうなるとお互い相手に対して悪い印象を抱いており、なかなか修復が難しくなってしまう。また、実際にこのようなトラブルがなくても、自分が相手に対し悪い印象・感情を抱くと何も語らなくとも、相手はそれとなくそれを察知してしまう。そう感じられる経験をされた方は多いと思います。そういう感情があると恐らく表情、態度、所作などに微妙な変化が出るのだろう。これは憶測、勘違いで相手を見てしまっているということかもしれません。

江戸時代の朱子学者に細井平洲^{ほそいへいしゅう}という人がいます。財政難に陥った米沢藩第九代藩主上杉鷹山^{うえすぎやうざん}が生涯に渡り師と仰いだ学者で、尾張藩の藩校である「明倫堂」督学(校長)として、その名を歴史に残していますが、その教えに人にとって最も大切なのは譲り合う心、「譲る」、「相手を思いやる」、人と人との交わりにあっては、思い上がりの気持ちをなくして譲り合う気持ちを持てば、お互い心が通じ合い物事もうまく運ぶと説いています。また、人との交わり方について「先施の心」ということも説いており、人との交わりにおいては先ず施すということ、相手からの働き掛けを待つのではなく、自らが親しみを持って接していく。そうした自らの働き掛けが人の心を動かすと言っています。特に年長者と年少者、上司と部下といったような上下の関係にあっては、上に立つ方から進んで働き掛けることが大切だと説いています。

挨拶なら自ら進んで挨拶する。相手に親切を求めるのではなく、先ず自分から進んで親切を行う。(親切の押し売りはいけません)そのことによって人間関係をより円滑にするだけでなく、自らの人間性をも高めることに繋がる。

かつてのその職場においては色々なやり取りがあった後、その方と職員、それに職員の上司も加わってじっくりと話した結果、双方がお互いに自らの言動を謝し、事なきを得、元の鞘に収める事ができた。

人間の感情は様々な外部要因や環境によって簡単に左右されがちである。その日の天気一つで気分も変わってくるし、加えて家庭のこと、仕事のこと、職場の人間関係等々些細なことであっても人の心に少なからず影響をもたらすものである。事件当日のご両人も何かネガティブな気持ちがあったのかも知れない。

いつも明るく、ポジティブな感情を持ちたいところであるが、対人関係において知らず知らずのうちに相手を不愉快にさせていることがないだろうか。人間だから当然、環境による心の変化はあると思うが、人とのコミュニケーションにおいてはできるだけ相手に悪い感情を抱かせることがないようにしたいものである。

公益委員として相談業務という特にコミュニケーションを必要とする仕事に就くことになり、改めてこのことを考えることであった。